

第3回（前回）委員会意見の取りまとめ

コンセプトに関する意見

- 道の駅における「荒尾らしさ」として意見が多かった「夕陽」が、南新地地区ウェルネス拠点のコンセプト「夕陽が照らすウェルネス拠点あらお」として反映されている。
- アンケートの結果を見ても、食の部分に期待されているということが分かった。
- 『有明の海と小岱の山で紡ぐ「食ものがたり」』という副題は、道の駅あらおを表わしており、キャッチーである。
- 食にフォーカスして仕掛けるならば、徹底的にエリア内、あるいは、周辺の競合分析をしていく必要があるのではないかと。周辺の競合分析を行うことで、整備の方向性を強化していくと構想の精度が更に高まり、施設機能の具体案にもつながってくる。
- 具体的に「しあわせ」とは何なのか、「しあわせ」と「元気」の定義が「食」で説かれていると分かりやすい。
- 顧客満足度というものが、満足から感動に変わってきている。人は、期待以上のものを提供された時に感動し、心がワクワクする。感動体験として、ここでしかできないことを「食」を通じて提供することなのかなと思う。

道の駅の整備に関する意見

- ますます高齢化し、生産者も減っていく中で、どうやって品物を集めるのかというのは大きな課題、大変な問題。
- 南新地地区のまちづくりを進めて行く中で、緑ヶ丘地区周辺がどうなるのか。緑ヶ丘地区周辺が疲弊していくということにならないかと心配している。
- 荒尾駅周辺・緑ヶ丘地区周辺の2か所が本市の中心拠点としてしっかりと発展していくようなまちづくりをしてほしい。
- 農家、農業委員会、農林水産課が一緒になって協力し進めていかないと、道の駅は作ったが農産物は集まらない、では話にならない。たくさんの人を引っ張ることが出来なければ難しい状況になると思う。
- あと4年、5年後には若手農業者がかなり育ってくる。多種多様な農産物、露地野菜も含めて、道の駅に提供してもらう。
- 後継者については、いい方向に転換してきていると感じている。とにかく後継者がいないと、30年先には道の駅はない。
- やる気になればやり方はあるのではないかと。そうやって、我々の街を活性化していかなければならない。
- 夕陽が見える道の駅、有明海沿岸道路のサービスエリア機能としての道の駅、ゆっくりと過ごせる道の駅、絶景の道の駅として、市民もインバウンドを含む来訪者も楽しめる道の駅にしていきたい。
- レンタサイクルの導入があるのであれば、道路整備も必要。水鳥・湿地センターまで自転車で行きたいと思う方も多いと考えられる。

食に関する意見

- 食という切り口で考えた場合に、まず消費者の志向に沿ったものでないと、全く意味がない。
- 健康というものは食だけで成り立つわけではなく、運動・栄養・休養の3要素になっている。
- 運動と食の機能性メニューを使った考え方。リラックスに近い食をどこまで提供できるのか。
- 具体案に入る前に機能性を検討していくとアイデアが広がっていくのではないか。
- 交流施設であるため交流機能を付加していくとよい。健康・教育的な要素を含めた料理教室のようなものを提供してもおもしろい。
- 6次産業化となると人も時間もお金も足りない。
- ウェルネス拠点全体としての荒尾の特徴が夕陽である以上、景観が楽しめるようなつくりというものは十分検討していく必要がある。
- 与えるだけではなく、子ども達と一緒に料理が楽しめる場所があったら良い。
- 荒尾市には食の名人が数名おり、有明海のマジャクを活用した料理なども作っている。
- 健康というものは心の健康もある。心の健康として、皆と楽しい時間を過ごすというものもある。
- 特別な体験があると差別化につながり、外から来た方に対しては非常に強みになる。そのような体験からは感動も生まれる。
- 独自・本物を磨いていくとよい。荒尾市にも特徴的な独自の食というものはある。
- 飲食施設として色々な機能があると魅力的である。一般的なものではなくきちんと専門家にテナントで入ってもらった方がよい。
- 個人店舗の出店は、人材確保等の面で難しい。週末のマルシェなどとなると、協力してもらえる店舗はあると考えている。
- 道の駅であるならば、荒尾産のものを販売してほしいし、外から来た方にも荒尾のものを知ってほしい。
- 夕陽を見ながらの食事というものを夢描いている。
- 問題は経営である。出店・出荷の意向を示した団体の中から経営してもらいたいと思っている。

※上記は、各委員からいただいた意見のみを抽出しております。質問事項などの詳細に関しては、別添議事録要旨を参照ください。